

「貞山・北上・東名運河 ーその歴史と現状ー」(要旨)

講師:高橋 幸夫 氏(会員)

会場:日立システムズホール[青少年文化センター 研修室 1]

貞山運河は、阿武隈川河口から塩竈の31.5kmを結ぶ、慶長年間開削の“木曳堀”、万治～寛文年間の“御舟入堀”、そして明治初期の“新堀”の3運河の総称です。また、東名・北上運河は、16.4kmで、明治10年代に開削されました。

今回は、これらの運河の開削歴史や役割及び現状について、これまでの情報収集の成果に基づき解説して頂き、運河のあるべき未来について考えるきっかけに出来たらと思います。

講師は、宮城県企画部在勤中に『情報は発信するところに集まる』ことを実感。その後(財)宮城県地域振興センター出向時には自主調査研究として、地域活性化のためのポータルサイトを立ち上げ、有志とともに平成25年までその運営を続けて来たそうです。

この間、水との戦い400年の象徴ともいふべき貴重資産の貞山運河や北上・東名運河に関する情報発信が、各々の市・町部分に限られ、かつ内容が希薄で、全体像を紹介するにはあまりに不足と痛感。このことから、『貞山運河事典』のサイトを立ち上げ、関連行政機関や団体・個人の協力を得ながら運営しています。



木曳堀

司馬遼太郎の『街道をゆく』 昭和60年2月25日に貞山堀を訪れており、『街道をゆく26 嵯峨散歩、仙台・石巻』で「ともかくこれほどの美しさでいまなお保たれていることに、この県への畏敬を持った。…宮城県がこれを観光として宣伝することなく、だまって保存につとめていることは、水や土手のうつくしさでよくわかる。仙台藩の後身らしく、武骨で教養のある風儀が、そのことで察せられるのである。」と絶賛されている。

I 仙台湾岸地形の変遷 右図:「仙台平野の地形分類」(後藤東北大学准教授)
 ◆約5千年前に形成された第Ⅰ浜堤列は海岸線より約3~5kmの内陸に、約2千年前の第Ⅱ浜堤列は約2kmの位置に前進し、そして約7百~1千年以降ほぼ現在の第Ⅲ浜堤列が展開された。
 (※この浜堤間の低湿地が排水の悪い荒野となっている。)



II 仙台湾岸運河の概要

1 運河の構成と位置



◆左図の○数字は歴史的に古い順を示しており、木曳堀(慶長2~6年 ※異説有り)、御舟入堀(万治元~寛文13年)、新堀(明治3~5年)、北上運河(明治11~14年)、東名運河(明治16~17年)の順である。木曳堀から御舟入堀は、明治13~14年頃、政宗の偉業を後世に伝えようと「貞山堀」と名付け、明治22年に「貞山運河」と改称された。(※名称変更の詳細はVの2参照)

2 貞山運河の概要

貞山運河の前身 貞山堀(阿武隈川~松島湾)の成立			
名称	木曳堀(南部水路)	新堀(中部水路)	御舟入堀(北部水路)
成立順	1	3	2
成立年代	慶長2~6年 (1597~1601) ※異説あり	明治3~5 (1870~72)	①塩釜牛生~多賀城大代 万治元年(1658)以前 ②大代~蒲生 寛文10~13(1670~73) 七北田川河口を湊浜→蒲生
人物	伊達政宗 (川村孫兵衛)	旧仙台藩士 (秋保昇等)	①政宗~忠宗(佐々木只太夫) ②綱村(和田織部・佐々木伊兵衛)
区間	阿武隈川(岩沼市納屋)~ 名取川(名取市岡上)	名取川(仙台市若林区藤塚)~ 七北田川(仙台市宮城野区南蒲生)	七北田川(仙台市宮城野区蒲生)~ 松島湾(塩竈市牛生)
現在延長	約15km	約9.5km	約7km
幅員	7~14m	7.3~9.1m	12.7~14.5m

◆阿武隈川~松島湾(塩釜)までの貞山運河の概要は左表のとおりである。
 ◆木曳堀は「きびきぼり」ともいわれるが、仙台市史では「こびきぼり」としている。



題字: 高倉 淳初代会長 揮毫

みやぎ
街道
交流会
ニュース
第33号

2016. 3. 30 発行

- ◇御舟入堀は、2段階に分かれて開削され、それぞれ関わった人物が違い、佐々木伊兵衛は孫兵衛の3女の婿とされている。なお、政宗の構想を後世に実現した形になると思う。
- ◇全体の延長は31.5kmであったが、仙台港の開削に併せ蒲生の部分が埋め立てられて、現在は27.7kmになる。
- ◇舟を使う理由は、馬に米俵を載せて運ぶよりは大量に輸送出来た。1駄は36貫(135kg)、米俵は2俵で1駄の取決めのようなものもあった。イギリス Towpath の例:馬車で2t、自然河川を馬で引くと30t位、運河では50t位輸送可という。

3 木曳堀



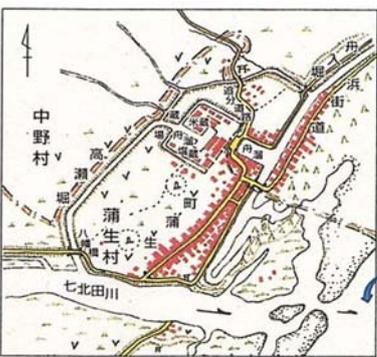
- ◇中間付近「赤井江」があり、隣接して県南浄化センターや岩沼海浜緑地公園南ブロックがある。震災後の現在は、松林の造成等が進められている。南部側には岩沼市が「千年希望の丘」の造成に合わせ混淆植樹等がされている。
- ◇閉上水門は復旧工事中だが、運河の利用を考える時に舟を浮かべたいという話があるが、水門の高さと幅の空間に気をつけなければならない。
- ◇大正末期の左写真では、ごみ捨て場にも使われていた。司馬遼太郎が訪れた昭和60年までの30年の間に、昭和以降の世代の人々の運河に対する思いが強く、良い運河景観が造られていったのだと思う。

4 御舟入堀

- ◇大代・蒲生運河の任にあたった和田織部房長が竣工記念として、寛文13年3月に塩竈神社に献上した石灯籠が唐門口左にある。

七北田川流路の蒲生への変更開削 (右図)

- ◇慶長年間(1596~1615)に蒲生村肝入の小野源蔵によって実現した(蒲生村『安永風土記』の『代数有之御百姓書出』)。これには川村孫兵衛も関わったという説もある。



蒲生 (左図)江戸時代の想定図(出典:仙台市史)

- ◇蒲生には、米蔵、塩蔵、船溜などが整備されていたが、御舟入堀と七北田川は直結せずに高瀬堀で別の舟に積み換えていた。七北田川河口の流路は不安定で、位置形状を歴史的に比較してみることも面白いのではと思う。

舟曳堀

- ◇城下へは、蒲生で高瀬堀に積み換えられ、七北田川を遡り鶴巻の御蔵に運ばれ、この御蔵から苦竹までは舟曳堀(御舟曳堀)という堀があった。この堀は普段は空堀(※落とし堀)で、必要な時に梅田川から水を引いた。名称は、荷を積んだ舟を堀の両側から人力で曳航したことに由来すると考えられている。

5 新堀

- ◇権大属で卒長であった秋保昇等が旧藩庁から指令を受けて、明治維新後の家臣団の生活安定の失業対策事業として、堀の開削と荒野地開拓のための排水事業とを抱き合わせて、明治3~5年に開削した。その後、通船のための掘削に投入した自己資本の回収に向けて運河通行料の徴収を申請し、明治9年から認められた。(※同17年県が買収とのこと)
- ◇名取川との接点の藤塚のきれいな松林は、震災により全てなぎ倒されて無残な姿となった。

Ⅲ 貞山運河(木曳堀)開削に関する諸説

1 川村孫兵衛重吉

- ◇天正3年(1575)正月に長州阿武(山口県阿武郡)生まれ。慶安元年(1648)74才で没。孫兵衛夫妻の墓所(右写真)が石巻市普誓寺の裏にあったが、重吉神社とともに震災の津波により跡形もなくなっていた。(※「重吉神社氏子が墓碑を探し出し元に戻して、周辺も含めた整備を目ざして奔走している。」H26.7.30『石巻かほく』記事より)



- ◇伊達家家臣となった時期については諸説ある。木曳堀は政宗が孫兵衛に開削を命じたとされるが、それにも次のとおり諸説ある。

2 主な諸説

- ◇①慶長2年説、②慶長6年説、③慶長16年以降説、④慶長年間~元和年間説がある。
- ◇開削目的は、木材輸送・低水地排水とおおよそ似たものである。(なお、③説は、慶長大津波浸水地帯の排水、④説は阿武隈川流域と城下町を繋ぐ物資輸送と若干に相違)
- ◇背景認識として、①と②説は、孫兵衛が政宗に仕えた時期で分かれる。③説は、木曳堀が慶長大津波前だと被災して今に残っていないのでは、残っているということは津波後で、津波浸水地帯の排水を兼ねたのではないか。④説は、仙台市史の説で、関ヶ原の戦い後の1601年前半は上杉氏の動向が定まらず軍事的緊張状態が続いている状況下での領民を大量動員する大規模な運河開削は極めて困難としている。
- ◇政宗の仙台城に対する思いを考えると関ヶ原の戦いが決め手になっているのではと思う。まだ各説とも更に掘り下げていく価値があると思っている。 ※講師の高橋氏は、勉強会后、更に考察を深め、「四代綱村(肯山公)治世下の寛文年間(1661年~)における開削と解すべきに至った」として、その内容を Web サイト『貞山運河事典』で公開している。

IV 貞山運河と港整備

1 御舟入堀と仙台港整備

- ◇昭和 14 年頃に内務省仙台土木出張所金森誠之所長や、昭和 33 年の東北大学富田芳郎教授(地理学)から、塩竈港と貞山運河で連結し、仙台内港(掘込港湾)を建設する提案があった。昭和 37 年、新産業都市建設促進法が制定。運河による連結に着目し、重要港湾塩釜港の港湾区域に新港地区を編入。塩釜港の改修事業枠で建設推進が可能となった。
- ◇貞山運河は、港域に没する外に、昭和 39 年の港湾審議会において、掘込港湾の浚渫土砂で臨海工業用地を造成するため、仙台新港から七北田川まで(蒲生地区)の運河が消滅する計画が決定された。そして、公園化され細い水路として名残を留めるに至った。

2 御舟入堀と塩釜港整備

- ◇本来の御舟入堀は、牛生地区～蒲生地区で、牛生から先は塩釜湾内を水路として活用した。
- ◇「港橋側」に繋がる運河は、塩竈港修築に伴い、昭和 2～12 年に宮城県によって新たに作られたものである。(港橋にある案内板には、貞山堀運河と書かれているが、塩竈港修築により昭和に開削されたものである。)

V 北上・東名運河

1 野蒜築港計画

- ◇鳴瀬川河口部に一大貿易港を造り、国内・海外に結ぶ拠点港として、新市街地、内港、外港を造る野蒜築港計画に併せて、北上・東名運河が造られた。築港の計画は、明治 11 年 7 月に着工し、横浜港よりも早い。
- ◇野蒜運河(現北上運河)は明治 14 年 1 月、同 17 年 2 月に東名運河が開通している。なお、東名運河は、当初計画に無かったが、樫湾の閉塞の恐れが出たため開削された。
- ◇しかし明治 17 年 9 月、内港口突堤が台風による暴風浪によって被災し、第二期の外港工事に着手すること無く、幻の港となってしまった。
- ◇この港により、松島や女川などの候補地が考えられたが、塩釜港に絞られて行くことになった。
- ◇設計者は、内務省御雇長工師(技師長)のオランダ人ファン・ドールンで、功績として安積疎水が有名である。



2 北上・東名運河の概要

- ◇木曳堀から御舟入堀は、明治 13～14 年頃、県土木課長早川智寛(後に第 4 代仙台市長)が「貞山堀」と名付け、明治 22 年運河取締規則制定の際に野蒜(現北上)運河・東名運河に合わせて「貞山運河」と改称。
- ◇明治 11 年、早川智寛は、内務省土木局野蒜築港出張所主任(所長)として赴任して、明治 13 年に土木課長に就任している。
- ◇「日本一の運河」と強調のために貞山運河に北上・東名運河を含めることには、注意を払う必要がある。

名称	北上運河	東名運河	貞山運河
読み	きたかみうんが	とうなうんが	ていざんうんが
成立順	1	2	3(改修)
所在地	石巻市～東松島市	東松島市	塩竈市～七ヶ浜町～多賀城市～仙台市～名取市～岩沼市
着竣工年	明治11(1878)～14	明治16(1883)～17	明治16(1883)～23
事業主体	内務省	内務省	宮城県
財源	起業公債	起業公債	地方税・国庫補助金
護岸の現状	石積み・コンクリート	石積み・コンクリート	石積み・コンクリート
延長	12.8km	3.6km	31.5km(※現存28.9km)

3 野蒜築港の関連工事

1) 六大工事

- ◇宮城県令松平正直は、野蒜築港関連の水陸運輸整備を目的とした六大工事(総額 80 万円)の県債募集の計画を立てたが、県内で県債是非論が沸き起こり県会にかけず断念した。
- ◇その後、各郡が土功連合会を結成し、協議費支出を決定したことから、明治 16 年、松平県令は総工費 68 万円余の六大工事(七土木事業)を計画、国から鬼首路線経費を除く 3 分の 1 の国庫負担が認められ、17 年 3 月に起業式が塩竈で催された。(秋田県会は鬼首路線開削をまだ決定していなかった。3 分の 2 は地方税と協議費から支出。)
- ◇六大工事(七土木事業):①羽後街道鬼首路線(秋田県境～玉造郡名生定)の開削、②羽後街道中新田路線(名生定～岩出山～中新田～吉岡)の開削、③羽後街道古川路線(岩出山～古川～松山～野蒜)の開削、④陸中岐街道(沢辺～米谷)の開削、⑤東浜街道(米谷～志津川)の開削、⑥貞山運河の開削、⑦松島湾の浚渫
- ◇別に、宮城の松平県令は山形県令三島通庸と話し合い、関山街道の整備を進めた。

4 貞山運河の改修

- ◇野蒜築港工事の進捗に伴い、その効果を東北各地に及ぼすため六大工事(七土木事業)の 1 つである貞山運河(木曳堀、新堀、御舟入堀)の改修に明治 16 年に着手。
- ◇貞山運河改修工事は、松島湾口(塩竈市牛生～阿武隈川河口)の約 36km を 6 工区に分けて行われ、宮城集治監に収監されている者も動員された。(西南の役の国事犯動員説は誤りで、明治 14 年 4 月までに全員釈放されている。)
- ◇明治 22 年、貞山・北上・東名の各運河によって、北上川～阿武隈川までの通船が可能となり、築港中止後も東北本線の塩竈(明治 20 年 12 月開通)への繋ぎなど運河需要があった。しかし、流入土砂の堆積があり運河の維持管理は困難を極めたことと、明治 23 年に東北本線が一関まで開通するに及んで需要は激変して行った。

◇その後明治30年代に入り、鉄道まで敷設するという野蒜築港復興に向けた計画図が造られたが実現しなかった。

5 野蒜築港挫折の要因

- ◇野蒜築港が抱えていた問題点について、いろいろな分析がなされてきたが、主なものは次ことがあげられる。
 - ①仙台や石巻の都市から遠く、経済上の原則から離れた所に築港。
 - ②調査・計画不備と技術的な稚拙さ。
 - ③汽船時代に移行しようとした時代にも関わらず、河・運河の両面に対応しようとした。
 - ④まもなく到来する鉄道時代を見通していなかった。
 - ⑤建設及び修築工事費用が巨額(松方財政緊縮政策の推進)。
 - ⑥東北地方の経済力・企業力の弱さ。

VI 浦戸諸島「寒風沢島」

1 若宮丸漂流

- ◇最初に世界一周をした日本人は、寒風沢島出身の津太夫・佐兵と宮戸島の2名。宮戸島にオロシア漂流記念碑がある。
- ◇寛政5年(1793)、若宮丸が石巻から江戸への途中、塩屋崎(いわき市)沖で遭難し、アリューシャン列島に16名が漂着した。その後、ロシアの帝都ペテルブルグでアレクサンドリア皇帝に謁見。帰国を望んだ4名は、大西洋・太平洋を経て、12年後に帰郷した。

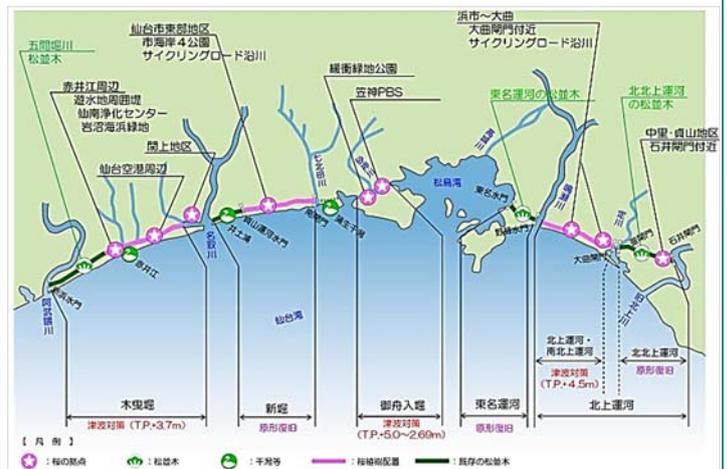
2 造艦碑

- ◇幕末に仙台藩がここで建造した洋式軍艦「開成丸」を讃える碑がある。大震災で倒れていた。
- ◇安政3年(1856)着工、翌年進水したが、文久元年(1861)に消失している。軍艦で有りながら江戸まで物資も運んだりしていたが、船足は遅かった様だ。(この船について、日本最初の洋式軍艦という人がいるが間違いである。)

VII 貞山・北上・東名運河の災害復旧

- ◇これらの運河は、東日本大震災の大津波により、堤防や護岸などが甚大な被害を受けた。また周辺の松並木も、その多くが流出したことで、美しい景観が失われている。
- ◇宮城県は、運河とその周辺地域を東日本大震災からの復興のシンボルと位置付け、未来に向けた「鎮魂と希望のエリア」として再生するため、運河沿いに桜を植樹する取り組みを進めている。(右図)

- ◇復旧のイメージは、護岸として寄石を施し、法面はブロック張るが覆土して緑化をする。また堤防に接して松を復元するが、一部区間の山側には桜を植樹することとしている。



結びにかえて 一各地に見る親水情景一

① 宮城県内

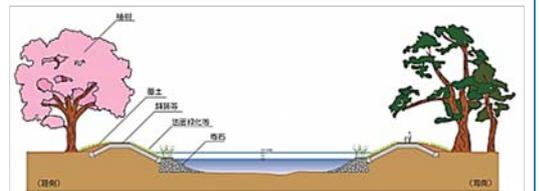
- ◇これまで地引き網、舟での遊覧は行われてきた。また、「貞山運河フェスティバル」は、13年間続けられてきたが現在中止している。他に野蒜築港関係で、ガックで煉瓦橋台を訪れたり、震災の前年にはサセトルーゾングが行われた。

② 宮城県外

- ◇水郷の揚舟・矢田川めぐり(群馬県板倉町)、近江八幡水郷めぐり・八見堀めぐり(近江八幡市)、復元したチヨ口船乗船体験(宮崎県日南市堀川運河)、ポンポン船を復元・観光船として活用(函館湾内)、NPO 法人あそんで学ぶ環境と科学倶楽部・電池駆動ボートでエコツアー(東京都中央区)などがある。

③ 海外

- ◇3,200km に及び運河を管理する「ブリティッシュ・ウォータウエイズ」(イギリス)では、ボート・カナ、ウォーキング・ランニング、サイクリング、歴史遺産などのカテゴリーの取り上げ方が工夫され、Web サイトで紹介されており参考になる。
- ◇オランダの運河飛び(フィーエルヤッペン)は、水の中に立てられた棒に飛び移り、対岸まで飛び越す競技(右写真)であり、国際的フェスティバルとなっており、大阪府岸和田に日本の協会がある。



④ まとめ

- ◇名取や石巻で運河フェスティバルを開催することは良いが、天下一品のものをそこに組み込んでやると、仙台空港や仙台港などの様々な海外との繋がりや融合し、もっと素晴らしいものになっていくのではないかと。フィーエルヤッペンはその例であり、これまでの風景と違うイベントが実施されれば良いのではないかと。
 - ※紙面の都合上、図表や写真を含めて大幅な要約になってしまいました。詳細は、Web サイト『貞山運河事典』を参照ください。<<http://www.teizanunga.com/>> 又は[貞山運河事典]で検索。 また、()内の※書は編集部の注記です。



《編集後記》

- 今回は年度内の発刊を目指していましたが、ギリギリになってしまいました。お詫び致します。
- 今回は、第2回勉強会の特集号です。超要約となりましたので、Web サイト『貞山運河事典』を覗いてください。

- 新年度は、みやぎ街道交流会の発足10周年となります。記念事業を6月18・19日に開催する予定です。
 - 当会発足の地「寒風沢島」にこだわった内容の講演会に、寒風沢島の民宿での街道談義と島内探訪会(2日目)を検討中です。詳細を4月末までにはお知らせします。(やま)